2017年6月21日発行　（不定期発行）

オアシス新聞

第三十六号

何色見えるかで感性が違う？虹の色

梅雨時の雨上がりや夕立の後など、夏は虹を見られる確率が高い季節です。大空にかかる七色のアーチを見つけた時、隣にいる見知らぬ人にでもいいから『虹が出てる！』と言いたくなるほどワクワクしませんか？噴水やホースの水しぶきから現れる小さな虹を見ただけでもうれしくなるのですから、大きな虹が見られたときは、そのくらいに興奮してしまいます。

虹は雨粒に太陽の光が反射して発生するので、必ず太陽とは逆の方向に現れます。お天気雨や雨が上がった直後に日が差してきたときなど、虹が見られそうな天候だなと思ったら、太陽に背を向けて探してみましょう。

ところで虹の七色をすべて答えられますか？虹の色は外側から赤・橙・黄・緑・青・藍・紫となります。虹が何色かというのは国によって認識が違い、アメリカは六色、フランスは五色などと言われています。虹は絵で描いたようにくっきりと色分けされているわけではなく、赤・黄・青・紫などの色の間に無限の中間色があります。目が良くて感性が豊かな人には十色くらいに見えるかもしれませんし、大まかな人には赤・黄・青くらいに感じるかもしれません。日本でも昔は五色くらいの認識だったそうですが、科学者のニュートンが虹の色幅と音階の音幅の共通点を見つけ出し、虹の色は無限と知りつつも、音階（ドからシまでの七音）と同じ七色という考えを提言し、それが日本にも伝わってきたのだそうです。

そしてはっきり見える虹（主虹）の外側に、もうひとつうっすらとした虹（副虹）が見えることがあります。そのとき注意して見ると主虹は外側から赤～紫と色が並んでいるのに対し、副虹は外側から紫～赤というように正反対に並んでいます。その仕組みは科学を極めないと理解が難しいですが、『上の虹と下の虹では色の並びが真逆』だと知っているだけで、ちょっと物知り扱いをしてもらえそうですね。

発行・編集：横浜市指定管理者　緑とコミュニティーグループ